

1-1

気になる言葉(1) 「～的」

「的」、外来語、英語、あいまい表現、ぼかし、主観の主張

「～的」はあいまいでぼかした表現と言われるのはどうしてですか。

用例 「ぼく的にはもうちょっと明るい色がいいのだけれど、あなたの的にはどう？」

「的」は“romantic (roman + tic)”のように、英語で形容詞を作る接尾語“tic”からきた外来語とされています。それを中国語の助字（文法的機能を持たされた文字）の用法に習って、名詞の後ろに接続して、形容動詞を作り出す働きを持つ言葉として、江戸時代の終わりごろから明治にかけて広く使われるようになったといわれています。

『三省堂国語辞典』によると、「的」の意味には、次のようなものがあります（用例は筆者による）。①～についての（「心理学的考察」「歴史的な見解」など）、②～のような（「異国的な情緒」「牧歌的な風景」）、③～の状態にある（「無意識的な行動」「典型的な反応」）、④～らしい（「日本人の体型」「ビジネスマンの発想」）、⑤～にかなう（「規則的な生活」「理想的な彼氏」）、⑥～の性質を持つ（「場当たりの発言」「首相の官僚的な答弁」）。すなわち、「的」には、②のように似ているがそれぞれのものは少し違う、あるいは、③⑥のようにそれに近いという意味があるようです。

「あいまい表現」「ぼかし表現」とはどのようなものなのでしょうか。実はこの両者は日本人のコミュニケーション方略としてはきわめて大事なもののなのです。日本人は、集団の傾向に合わせて行動することを常に求められています。いわゆる「空気を読む」ということです。特に目上の人の意向を大事にすることが重要です。それに逆らって反対したり、否定したり、拒否したり、トンチンカンで場違いな返事をしたりすると、「KY」（＝空気が読めない）などとレッテルを貼られてしまいます。そのために、我々はどんなことに気をつけているのでしょうか。

それにはまず遠慮をすることです。そのための手段の一つが様々な方法で自分の発言を「ぼかしてあいまいにする」ことです。

「的」は、先ほどの辞書の意味にもありましたように、「それとは似ているが少し違う、近いものがある」という意味で使います。それを「ぼく的には」「あなたの的には」と使う

ことで、「ぼくの意見を主張しているのではありません」と遠慮した含みを持たせているのです。なぜそのように言えるのでしょうか。似た表現から考えて見ましょう。

話者をぼかす言い方としては、「個人的意見」「個人的見解」の「個人的」という言い方があります。この「個人的」の意味は何でしょうか。そのためには「個人的」の反対を考えてみると分かりやすくなります。それは、「公的」です。「公的発言」などと使いますね。これは「自分の社会的地位や立場に基づいた社会に対する発言」ということになります。これは、その人の立場が重くなるにつれ、社会に対して非常に大きな影響を及ぼします。ですから政治家などは、そうではない「個人的な考え」と断って発言をすることがよくありました。いわゆるダブルスタンダードです。つまりオフィシャルな発言と、その人個人のパーソナルな発言とは異なるのです。

日本人は、伝統的に集団合議制を重んじてきました。そしてその代わり、別に首相でなくても、個人的に一つの問題の責任を一人で取ることのないように、意識的にも無意識的にも気をつけてきました。それが以上述べてきた「公的」発言と「個人的」発言の違いを生み出すことになったのでしょう。

話を「ぼく的には」に戻しましょう。「ぼく的には」「個人的」よりもなお一層遠慮した言い方だと思われます。つまり、「個人」は「社会」あつてのもので「個人的」なことは社会における個人の行動を指しますが、「ぼく」は「あくまでも一人の人間の存在」です。ですから、この「ぼく的には」「個人的」よりもさらに一歩引いた言い方だといえるでしょう。

もう一つ、考えられることがあります。中国語の「的」の働きの一つは、日本語の「私の～」「あなたの～」の「の」と同じで、ものごとの所属や所有を表します。「我的愛人」とは「わたしの愛しいあなた」という意味です。漫画などで中国語がそのまま使われるほど今ブームですが、もしかしたら、その影響があるのかもしれない。

さて、以上述べてきたことから考えますと、この「ぼく的には」「わたし的には」という言い方を使ってはずいぶん場面がありそうです。それは職場などにおける会議や、契約・交渉などの重要な約束事の場面です。日本国の首相が「わたし的には増税したほうがいいと思っている」などと言おうものなら、日本国中が混乱しそうです。一歩引く謙虚な姿勢も、時と場合によりけり、だと思います。

（木下哲生）

参考文献 広田栄太郎「「的」という語の発生」（『近代訳語考』東京堂出版 1969）
文化庁『国語に関する世論調査 平成11年度』（大蔵省印刷局 2000）